

岩礁が多く、古くから難所とされ、難破する船が続出していました。そこで、その対策として江戸幕府が鳥羽藩主であった内藤忠政に命じて菅島に「かがり火小屋」を設置しました。明治時代になると、



135年もの間、航海する船を見守っています

今回から離島の文化財に目を移してみましよう。菅島には、菅島灯台があることはみなさんご存じかと思いますが、この灯台は実は非常に重要なものなのです。菅島灯台の付近の海域は、

新政府は、灯台建設を進めましたが、当時、わが国にはその技術も灯明の機械もなかったため、イギリス人のリチャード・ヘンリー・ブランドンという技術者を招き、明治5（1872）年から菅島灯台建設に当たりました。当時の日本には、建設のために必要なレンガがなく、輸入も禁じられていたため、国



灯台には、明治6年癸酉7月1日初照と刻まれています

内で造ることになり、志摩地方の神明や渡鹿野の土を使用し、生産しました。また、日本人の大工や石工職人も多数参加して工事が行われました。こうした苦労と努力により、明治6年7月に高さ8・5mの立派な灯台が完成しました。竣工式には多数の政府の高官が出席しましたが、西郷隆盛も出席したといわれています。なお、灯台と共にあった職員官舎は、昭和39（1964）年に明治村に移築されて国の重要文化財に指定され、現在に至っています。菅島の灯台は、日本最古のれんが造りの灯台として、現在も、航海する船の安全を見守っています。菅島のシンボルとして、後世に残していくべき重要な歴史的建物といえるでしょう。

鳥羽のお宝 再発見!



vol.9

教育委員会生涯学習課
☎ 1268

日本最古のれんが造りの灯台 菅島灯台

おんなで子育て



子育て広場

だっこでほっと

新年あけましておめでとうございます

vol.7

子育て支援センター

☎・FAX 7221

みなさまおそろいで新しい年をお迎えのことと思います。新年は「あけましておめでとうございます」のあいさつで始まります。昔は、あいさつを「言葉かけ」と言い、人と外で出会ったり、すれ違ったりした際は言葉を掛けるのが一般的な礼儀でした。何かにつけ協力し合い、助け合う、深い間柄でありたいと思う人が多かったのですが、最近では、深い人間関係はわずらわしいと、差し障りのない程度に付き合い、「あいさつ」をしない人が増えています。そうすると、人間関係がますます希薄になっていくように思います。特に「おはよう」は「お早頃からご苦労様でございます」の略で、相手を気遣いねぎらう気持ちからの言葉です。こどもたちにも「あいさつ」

をする大切さを伝えたいですね。それにはまず、お父さん、お母さんが率先して、あいさつをすることです。「こどもは親の背中をみて育つ」と言われるように、親の姿を見て、こどもは自然にあいさつをするようになります。そして、笑顔で「おはよう」。その元氣と笑顔が周りを豊かにしてくれます。「だっこ」のお友だちも「おはよう」と元氣に返してくれたり、頭をペコリと下げたり、小さなお子さんでもニッコリほほえみ返してくれます。あいさつの大切さ、笑顔の大切さを心に留め、今年一年、病気やけがのないすばらしい年になることを願っています。今年も、みなさんにほっとしていただける「だっこ」でありたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。